

買ってそれに当てた。そのネズミからペスト菌が検出され、朝鮮人女性は発熱していたため隔離されてしまった。彼女はペストではなく、何日もたって解放されたが、実は破傷風であったため、衰弱して亡くなってしまった。

小説中のペスト禍の街の様子を拾ってみる。

「新京の街に、農安のペストが入りこんできたのは、丁度その秋のことであった。」「この時のペスト発生は、日本自身の謀略だとか、敵方の謀略だとか、今でもそんな事を云ってゐる人があるが、あれは単純な自然発生だったろう。」「生憎と、その自然発生の箇所が、三不関（三不管）であったから、私達寛城子に住む者は、大恐慌を感ずるわけである。」「ペストは秋深くなると同時に、ますます蔓延の気配である。はじめは腺ペストであった。蚤に喰われさえしなければ、伝染の危険がないわけだ。その腺ペストが、どういう風に肺ペストに進化していくものか、医学的常識に乏しい私は知らないが、新京を襲った昭和十何年のペストもとうとう肺ペストの段階にまで、移行した。空気伝染をするという。」「私はあの三不関を、甚だ愛好したものである。寛城子から新京に抜ける折、新京から寛城子に帰る折、私はきまって三不関の中に足を踏み入れ、一斤の白乾児を買って帰ったり、焼餅をかじったり、家鴨や、人間や、豚共の、泥の中の雑居の状態を眺めて喜んだものだ。」「辻々には、マスク着用の警官が立っている。そこを通行する軍人、官吏、会社員、並びにその婦人、子供達、赤ん坊にいたるまで、全部、顔いっぱい大きいマスクをかけているのは勿論のことだ。」「通行人という通行人が、誰もかれも、顔の大半を布でおおって、行き交う有様は凄まじかった。」「マスクの次には、鼠狩りだ。一戸について、一匹ずつであったか、二匹ずつであったかは忘れたが、鼠供出の割り当命令が下されたものである。殊更、寛城子は三不関の隣である。ネズミ供出の割り当ては、格別にやかましかった。私の家にも割り当てがある。愛蓮の家にも割り当てがある。『困ったのよ、どうしてもネズミが掴まらないわ』『そんなこと問題じゃないよ。ネズミなら買やいいじゃないか。いくらでも売ってるよ。』」「そのネズミ売りはすぐにみつかった。・・・ネズミは一匹四十七銭であったろう。・・・そのネズミに札を付け、所番地、姓名をしるし、供出をするわけだ。隣り組長が、石油カンに荒縄をかけて、ネズミを受け取りに廻ってくる。」「三不関全体が、焼き捨てになるという。・・・『ね、愛蓮、今日、三不関の焼き捨てを見に行かない？』・・・私達は馬車に乗って出かけていった。・・・もう町は燃えていた。・・・何町四方位あるだろう。その町がブリキで包囲され、焼き払われている周囲を殆ど一周するのである。・・・全く、申し譯だけの焼却に思われた。ネズミならいくらだって這い出すスキがあるだろう。」

檀は以上のように、新京のペスト流行時を描写しているが、彼は軍隊を召集解除され、1940年12月に新京にやってきた。この時は丁度、ペストの流行は終息したばかりである。流行時の様子を誰かに聞いたのであろう。三不関（三不管）が焼却されたのは事実だが、ここではペストは発生していない。（『細菌戦と現代』No.2を参照）

① (レファレンスコード：B04012647200)

昭和15年 58416 新京10月9日後発 本省10月9日夜着

梅津大使 → 松岡外務大臣 第451号

本年六月以来吉林省農安ニ「ペスト」発生シ罹病者現在二百七、八十名ニ達シタル處九月二十三日ニ至リ新京市内ニモ「ペスト」患者ノ発生ヲ見タル為同三十日以来患者発生地ヲ隔離シ防疫本部ヲ設ケテ鋭意防疫ニ努メ中ナルモ今日患者累計十九名内死亡者十五名ヲ算シ蔓延ノ微アリ當館ニ於テハ館員及家族使用人全員ノ予防注射ヲ行ヒ防疫上最善ノ處置ヲ講シツツアリ尚本月十一日以後ハ予防注射證明書所持者ニアラサレハ新京駅乗車ヲ停止シ同駅ニ下車スル者ニシテ同證明書ヲ所持セサル者ハ駅頭於テ予防注射ヲ行フコトナレリ以上不取敢

② (レファレンスコード：B04012647200)

昭和15年 58591 新京10月16日後発 本省10月16日夜着

梅津大使 → 松岡外務大臣 第466号

往電第451号ニ関シ

十日トリ関東軍防疫本部ヲ防疫用本部トシ防疫陣ヲ強化スルト共ニ映画其ノ他ノ興業集会ヲ禁止シ「マスク」使用ヲ強制スル等鋭意防疫ニ努メツツアル處十四日迄ノ患者累計二四名死亡者二〇名患者四名(真性二名疑似二名)ニ達シタルカー五日一六日兩日新患者ノ発生無ク當館職員及家族總テ健在ナリ尚軍側ヨリ他方面ヘノ伝播ヲ防キ防疫ヲ全カラシムル為必要ニムヲ得サルモノ以外ハ入京ヲ制限シ度キ意向ヲ以テ外務省側ニ於テ之ニ協力方依頼越シタルニ付右様御取計相煩度

③ (レファレンスコード：A04018570100)

京城帝国大学予科教授 森為三

右者滿州国政府ヨリ昭和一五年十月三十日ヨリ同年十一月五日迄一週間ペスト防疫ニ関スル事務委嘱方照会アリタルニ付右委嘱ニ応じ且旅費受領ノ件官吏服務規律第八条第一項ニ依リ御允許アラセラル度

謹ミテ奏ス

昭和十五年十月二十九日

④ (レファレンスコード：B04012649700)

公機密第1250号 昭和十五年十一月四日

在滿特命全權大使 梅津美治郎 外務大臣 松岡洋右殿

満州国ニ於ケル「ペスト」情況報告ノ件

本件ニ関シテハ曩ニ電報ヲ以テ及御報告置クル處右詳細資料今般別添ノ通送付セルニ付御
査閲相成度尚患者数等ハ部外秘トシテ御取扱相成り様致度

秘 満州国民生部保健司

ペスト発生日日計表（十月二十一日）

[以下略]

⑤（レファレンスコード：B04012649700）

昭和15 ~~5-9-24~~号 新京11月5日後発 ~~本省11月5日後着~~

梅津大使 → 松岡外務大臣宛 ~~第504号~~ ~~→電報~~

~~第9号~~ 「ペスト」流行状況

新京ニ於ケル「ペスト」ハ〔十一月三日現在ニ於イテ〕九月二十三日初発以来発生患者二
十七内死亡二四現患三ナル處十月二十一日ヲ最後トシテ新患者ノ発生無ク既二十一月一日
ヨリ交通遮断モ大部分解除セラレタル実情ナルカ満州国関係当局ニ於テハ猶大事ヲ執リ防
疫處置及民衆指導ヲ当分ノ間弛メサル方針 [以下略]

⑥（レファレンスコード：B04012647200）

昭和15年 58990 新京11月4日前発 本省11月4日前着

梅津大使 → 松岡外務大臣 第501号

貴電第538号ニ関シ（「ペスト」流行状況取調ノ件）

民生（部）ニ就キ調査セル概要左ノ通り（委細郵報）

[略]

一、新京ニ於テハ九月二十三日発生以来今月迄ニ発生総数二七死亡二四現患三ニシテ目下
尚現在一、二有菌鼠ヲ発見シツツアルモ二十二日ヲ最後トシテ新患ノ発生ナク終息ハ時間
ノ問題ト見ラレ居レリ

[略]

⑦（レファレンスコード：A04018570100）

京城帝国大学教授今村豊外十二名満州国政府ノ委嘱ニ応シ且手当ヲ受クル件

昭和十五年十一月十四日

内閣総理大臣公爵近衛文麿

⑧（レファレンスコード：B04012679000）

衛第3224号 昭和15年11月15日

朝鮮総督府警務局長 → 拓務省朝鮮部長

昭和16 50166 暗 新京1月11日後発 本省11日後着

梅津大使 → 松岡外務大臣 第8号

本使発蘇宛電報 第3号

客年貴電第一五五号及大臣宛客年往電ダイ五六四号号ニ関シ

農安ニ在リタル「ペスト」患者二名客年十二月二十九日治癒セルヲ最後トシテ在滿「ペスト」ハ全部終息シ農安ニ対シテ執リ来タレル鉄道其ノ他関係ノ防疫處置モ明十二日之ヲ撤廃スルコトトナリタリ

外務省ニ於テハ本日駐哈特派員ニ対シ本件ヲ在哈蘇聯邦総領事ニ通告方指令セリ

⑬ (レファレンスコード：B04012668100)

総番号39194 略 昭和16年10月11日 後6時40分発

豊田外務大臣 → 在新京 好富総領事

新京ニ於ケル「ペスト」ノ情況ニ関スル件

第37号

貴電第35号ニ関シ

九日新京発同盟ニ依レハ「ペスト」終息ノ結果十日一切ノ制限及禁止ヲ解除セラレタル趣ナルカ果シテ然ルヤ御回電アリ度

溝口雄三先生の“衝撃”

7月20日の第6回公判後に弁護士会館で、裁判報告会の後、溝口雄三先生（東京大学名誉教授）にお話をいただいた。会場の話の内容はとても受け入れられないという雰囲気は“衝撃”がいかに大きかったかを示している。話の感想を私なりにのべてみたい。

私達は中国（人）を長い間（今も）蔑視してきたという提起をされた。歴史の構成は、まず、事実をセレクトする。それを組み立てて意味を与える。ここで、清末の軍閥についての説明があった。軍閥は当時の中国の遅れたものを代表しているようにみえるが、そうではない。16、17世紀からの地方にさまざまな力が育成されて来た延長上に、地方分権化の内実が形成され、各省が独立し、それが清朝を倒したと。それが軍閥だと。これは、悪の権化である軍閥を倒して孫文が統一中国を作ろうと奮闘したという、私の見方（大方の人もそうだと思う）と激突した。そして、歴史はどのような物差しで解釈するかという3点セットで成り立っている。私達の物差しは、ヨーロッパの時代区分の歴史観であり、日本の歴史区分も古代、中世、近世、近代、現代と、ヨーロッパとよく似ている。しかし、中国は2000年の王朝は中央集権国家であり、封建制ではないと。それを、ヨーロッパ型の歴史観、近代化観を当てはめてきた。では、どう考えたらよいか、これだけでも、真に受け止めようとすれば大問題である。ここに私達の中国蔑視の根元があると指摘された。溝口先生の話はアジア型の近代化、「もうひとつの近代化」についての深い洞察である。『中国の衝撃』溝口雄三著（東大出版会）をぜひ読むべきだ。

満州国ペスト流行ニ関スル予防警戒ニ関スル件

[略]

其ノ他参考事項

十月二十九日満州国ヨリ新京ニ於ケルペスト防疫ノ為医師ノ応援方電請アリ本夫府ニ於イテハ之ニ応ズルコト、シ直チニ人選ニ上京城大学医学部今村教授ヲ団長トシ以下医師百十九名ヲ一団トシ本月一日新京ニ派遣シ目下同地ノ防疫ニ協力中ナリ

⑨ (レファレンスコード：B04012647200)

昭和15年 59463 新京11月26日後発 本省11月26日後着

梅津大使 → 松岡外務大臣 第531号

往電第504号ニ関シ

二十六日現在迄ノ当地「ペスト」罹病者総数二九名内死亡者二七名ナリシ處数日前総領事館ヨリ約百米ノ地点ニ真性患者発生シ事態尚必スシモ樂觀ヲ許ササルモノアリ当館鋭意防疫ニ努力中(了)

これだと、ペスト患者は30名となるが、高橋正彦論文によると「11月13日に発生セルペスト患者ヲ最終トシテ52日間ニ亘リ28名ノ患者発生ヲ以テ終息シタ」と合わない。

⑩ (レファレンスコード：B04012647200)

昭和15年 59728 (暗) 新京12月6日後発 本省12月6日後着

梅津大使 → 松岡外務大臣 第546号

貴電第599号ニ関シ(「ペスト」発生状況問合ニ関スル件)

民生部ニ就キ調査セル處左ノ通り

「ペスト」現患新京一、農安及建安県(孰レモ吉林省)各ニ合計五名ニシテ最近各地トモ新患者ノ発生ナク又有菌鼠モ発見セラレ居ラス大体終息セル模様ナリ

⑪ (レファレンスコード：B04012650600)

昭和15 59806 略 新京12月10日後発 本省10日夜着

梅津大使 → 松岡外務大臣宛 第550号

一、「ペスト」其ノ後ノ情況左ノ通り

一、新京ニ於ケル患者ハ一名ナリシ處七日全治セルヲ以テ同人ノ住家ヲ残シ其ノ他ノ交通遮断全部ヲ解除セリ

但シ為念新京各駅及新京周囲ニ於ケル出入者ニ対スル警戒ハ暫ク継続ス

[以下略]

⑫ (レファレンスコード：B04012649700)

原告団代表の王選さんの陳述書は東京高裁に証人申請のために作成されましたが、証人に採用されませんでした。しかし、皆さんに読んでいただきたくて、ここに御紹介します。

控訴人 王 選
陳 述 書

2004年7月15日

- 1 王選と申しますが、1952年8月6日中国上海市に生まれ、浙江省義烏市崇山村の原告です。

崇山村は父が生まれ育った故郷で、同族村として、現在2000人あまりの村人はほとんど王という名字で、同じ先祖の子孫です。1969年文化大革命の時に、私が知識青年として、上海から崇山村に下放され、1973年まで村で村民と一緒に畑で働いて、生活をしていました。

その後、大学で英語を専攻し、卒業してから、高校で英語を教えていました。

1987年に中国浙江省杭州市から日本に留学し、現在姫路に住んでいます。

日本軍の細菌戦被害者の遺族として、日本の平和運動の方々から学びながら、中国の細菌戦被害調査、関連研究をしています。

- 2 細菌戦問題に関わるようになったのは、偶然のきっかけでした。

1995年8月3日朝、姫路の自宅で取っていた英字新聞ジャパンタイムズを開き、ある記事が目飛び込んできました。その記事に以下のような内容が書かれています。

初の731部隊国際シンポが中国黒竜江省のハルビンで開かれ、大会で、日本の市民団体の方が中国にある731部隊細菌戦被害地浙江省義烏市崇山村を訪れ、実地調査をした報告をした。報告によると、731部隊の細菌戦によって、1942年崇山村でペストが流行した。

現在、村民三人が村を代表して、細菌戦ペストで亡くなった382人、日本軍によって焼かれた405間の家等の損害に対し、日本政府に「連合訴状」を提出し、損害賠償を求める。

私は崇山村にあったペストが731部隊と関係していると明確に書かれていることを見て驚きました。一体どういう関係だったのか、ともかく知りたかった。

実は、前にも、日本の人が崇山村を訪れ、戦争中日本軍が撒いたペストを調べたと弟に聞きました。1994年に、私が筑波大学から姫路に移り、日本での生活が少々落ち着いて来ました。そして、一回中国に帰りました。

上海の実家で、弟がやや緊張していて、やや興味深い顔で上海のある地方新聞紙の切り抜きを私に見せてくれました、“姉さん、日本人が崇山村に鼠疫を調べに来たよ”と切り抜きの記事を私の目の前の机の上に置きました。

その後、故郷に帰り、同族の王煥斌叔父(本件の義烏原告楼賽君の夫)と会い、王煥斌さんは私が日本から来たと分かり、すぐ村人たちは日本軍がやったペストに対して日本政府に損害賠償を求める活動をしていると私に話してくれました。日本の人がペストのことを調べに来た話もしました。その日本の方たちとの連絡方法を彼と考えていました。

日本に戻ってから、ある日、妹から突然電話がかかってきて、日本の市民団体が崇山村を訪れ、細菌戦ペストを調査する内容の記事が日本の新聞紙にあったと教えてくれました。私も中国で聞いた話を彼女にしました。二人が嬉しくて、お互いにその日本の市民団体の連絡先を調べようと約束しました。

それから一年が経って、何の手懸かりもなかった時に、このジャパントイムズの記事が現れました。

見た瞬間に、私は飛ぶほど喜んでいました。おかげで、その後、やっと、故郷の細菌戦ペストを調べている日本人と出会いました。

それは、1987年日本に来てから、始めて日本人から戦争の話聞き、始めて日本人と戦争についての話ができることでした。

3 弟、妹と私兄弟3人が子供の時から、父から日本軍が崇山村でペストを撒いたと教えられました。私の記憶に、父は二回当時の話しをしてくれました。

一回目は小学生の時のことと思いますが、その時の私の身長の高さは、丁度家の二階のベランダの窓の一番下から、庭を見えるくらいでした。“あなたに元々一人叔父さんがいた”とお父さんの話が始まりました。

お父さんに兄弟はおばさん(本件の崇山村原告王容儀)一人しかいないから、まだ他に男の兄弟もいるなんて、喜んで、“どこにいるの”と尋ねました。

そして、戦争中、日本軍が崇山村でペストを撒いて、毎日毎日沢山の人が死んでいた。当時13才の叔父さん王海宝もペストで死んだと答えました。先ほど、私の好奇心と喜びをその“ペスト”、“死”の言葉でぞっと冷やされました。

話しているお父さんは何か見ているような奇怪な恐怖の表情が目に見えており、両親がなくなり、長男として海宝を守れなかった悔やみ、むなしさが顔に写っていました。

当時の私にとって、とんでも無い暗い重い話でした。“死”がなんだ、と子供の私がいつも一人で真剣に考えていました。しかも、周りの友達に心を開いて、話すことのできない命題でした。

義烏地方公文書館に保存されている文書によると、1943年3月6日に、県衛生院

が崇山村のペスト死者のお墓が285箇所あると県政府に報告しています。同時期に、県衛生院院長楊堯震が崇山村に調査に行きました。

楊院長によるペスト後の村の光景は、付近の丘にお墓だらけでした。大抵、避難に急ぎ、草々に埋葬したため、墓の大半が崩れ、死体が犬によって外へ出されたのもありました。病原菌の拡散の恐れがあるから、楊院長が県政府に予算を作り、墓の修繕と死体の埋葬を要請しました。

崇山村は災難に打ちのめされて、飢えと寒さで困窮している。県政府は郷公所に郷内他の村人を動員して、崇山村を助け、お墓を修繕すると命じました。

- 4 二回目は文化大革命の前期でした。その時に、お父さんが紅衛兵に“売国者”とされて、厳しく取り調べられ、家も搜索されました。家族一家は闇につつまれました。ある日、父は戦争の時に自分に本当に何があったかを私に打ち明けたいと言いました。

私は本当は売国者の話を聞くのを恐れていて、もういいと言いました。お父さんは堅持して私に話を聞かせました。

日本軍がお父さんを捕まえて、そして崇山村のペストのことを細かく聞きました。父は彼らが持っているペストに関する専門知識、興味、崇山村の詳細の情報に驚かされました。崇山村のペストはきっと日本軍と関係があると疑っていました。

そして、“売国者”という罪名の根拠は、主に父が日本軍に捕まえられた時に、日本軍の前に膝まずかされたことでした。その時の私は、けして毎日お父さんを尋問している紅衛兵たちより必要な歴史知識を持ち、彼が侵略軍に跪かされた行為を理解できなかった。

そして、お父さんは貴方たち若い学生さんが以前の時代のことを全く知らない、その戦争は民族の災難だったが、なぜ僕一人が責められるのか。私の心の中に崩れそうなお父さんのイメージが立ちあられました。硬骨な父のその弁解は、日本人の前で跪かされることにより持たされた屈辱を乗り越えようとしている努力の一つでした。

気品の高い父が“屈辱”という言葉をも自分の口にしないでしょうが、しかし、私に深く伝わって来ました。

“死”以外に、もう一つ、私が一生涯も考え続けている命題は“死ぬか、それとも反抗できない暴力または権力に跪くか。”

(おばさん王容儀によると:上海の裁判所に勤めているお父さんに、故郷から祖母が病気に倒れた手紙が届いて、上海を出て崇山村へ向かった。戦時中交通が遮断され、360キロメートルの距離の旅に一ヶ月かかった。やっと着いたら、祖母はもう亡くなっていた。祖父は大部前にもう亡くなっていた。おばさん容儀と叔父海宝を上海へ連れて行こうとしているところ、太平洋戦争が勃発した。

上海に戻れなくなって、お父さんは一旦金華の国民政府の裁判所で勤務することになった。1942年中日本軍が浙かん作戦を発動し、金華を占領した。その内、お父さんが日本軍に捕まった。死ぬほど殴られて、すごい重荷を運ばされて、一回逃げ出して、又捕まった。二回目に逃げる事ができた。兄弟に会いに崇山村に戻る時に、顔はあざと傷だらけだった。)

- 5 崇山村の人々は過去の克服の為にも細菌戦裁判を起こしました。以来、他の村の人々と団結して、細菌戦被害調査を義烏全域に拡大しました。その上で、2001年前半に、民間募金で、1644部隊調査班が村人に生体解剖をやった場所としての林山寺で細菌戦被害者の記念亭を建てました。記念亭の後ろに、調査で分かった一千名を越える被害者の名前を刻んでいる記念碑が並んでいます。

2003年の始めに、村の入り口に焼かれた家の分布図の碑を付けました。

崇山村の近くに、王姓同族の家族祠堂曲江寺があります。清の時代の建物で、以前郷鎮の小学校、中学校に使われていました。今年になって、義烏市教育局が王姓家族に返してくれました。これから、村人はその建物に細菌戦歴史記念館を作ります。

崇山村は中国の広大な農村にある普通の村です。この村にあった細菌戦被害が中国全体被害の氷山の一角にすぎないものとは言えます。

無視できないのは、崇山村のように、一カ村の村人は、自らの力で以上のような努力を払い、侵略戦争の暴力に持たされた“屈辱”に立ち向かおうとしていることは、この細菌戦裁判の他の被害地にも見られ、まだ中国の他の細菌戦被害地域にも広がっています。

- 6 2002年8月27日に、崇山村の人々が村中心の広場に集まり、日本からの国際電話を待っていました。裁判“敗訴”と伝えられた時に、空から雷が伴って、今までにないような激しい暴雨が降り出しました。“神様も泣いた。”と村民たちが言いました。

その“敗訴”の結果は、村人に、細菌戦被害者に新たな“屈辱”と感じさせたと言えます。

言えば、紅衛兵たちがお父さんを“売国者”として批判したもう一つの理由は父が知識者として村人をペストから助けなかった。当時の父ができないことを私は引き継いでやっています。

しかし、細菌戦をやった被告側は、今までに被害者たちにまだ何にもしていないではないでしょうか、自分がやったことになんにもしなくても良いのでしょうか。

ある意味では、現在に生きるすべての人は、現代戦争に生き残ったものです。幸運に生き残った人間としては、現代戦争から生命とその尊厳を守ることは生まれつきの運命的役目ではないでしょうか。そして、不幸に戦争によって被害に遭われた人々を助けることは、生命とその尊厳を守ることに当たります。(以上)

戦争遺跡



中国吉林省長春に残る、第
100部隊（関東軍軍馬防疫
廠）の煙突



同、馬飼育に使われた建物

あふない日中関係

— 戦争責任と日中友好 —

10月30日(土) 午後1:30~5:00

会場：なかのゼロ・視聴覚ホール 資料代 500円

JR中野駅 歩いて7分

メイン・スピーカー 荒井信一（日本の戦争責任資料センター代表）

聶莉莉（東京女子大学・文化人類学）

ゲスト・スピーカー 王選（731細菌戦裁判原告団代表）

陳致遠（常德市・湖南文理学院・歴史学）

楼 献（杭州し・社会学）

裘為衆（寧波市・ジャーナリスト）

その他多数の発言者を予定しています。 司会・むとう有子（中野区議）

第9回公判 **12月7日(火)** 午後1:30~ 東京高裁101号法廷

《 専門家1人と原告2人の証言 》

管健強（上海政法学院教授 国際法）

『日中共同声明』等の対日戦争賠償請求権問題に関して

原告 範 小青（寧波の幸存者、故銭貴法さんの妻）

熊 善初（常德、1929年9月生まれで75才。細菌戦で兄2人と甥2人を亡くした）

「細菌戦と現代」購読のお願い 年5回発行 2000円

裁判の案内、731部隊関係の資料の紹介などを掲載します。

郵便振替口座 00110-4-86543 731・細菌戦裁判キャンペーン委員会

インターネットで、「731部隊細菌戦国家賠償請求裁判」を検索して下さい。

詳しい情報が満載です。

連絡先 〒343-0832 埼玉県越谷市南町 1-7-5 奈須方

731・細菌戦キャンペーン委員会 Tel・Fax 048-985-5082